

準ハイブリッド日蝕

元69生 谷川 政敏

今回は執筆要請のあった前回の‘83インドネシア・ニューギニア日蝕に続き、‘84アメリカ金環蝕のレポートを提出します。

この日蝕は食分 0.998 の極めて皆既に近い金環食であり、1 サロス前は綺麗なベイリービーズになった事でも知られている。今回の最長皆既?時間は 11 秒、観測地はアメリカ南部のリッチモンド市近郊です。

旅程は 5/27 (日) ~6/3 (日) となり、当時存在した青山天文館が JTB にリクエストしたものです。

日本からの遠征者は少なく我々 14 名だけのようで、現地で天ガの写真班 2 名の取材を受けた。

TUD 関係の参加は谷川以外に伊藤秀典・祐子の新婚夫妻で、東京ターミナルでは後輩 OB の見送りがあった。

この企画の目玉となるのはリッチモンド天文協会との交流、スミソニアン博物館見学等々です。

青山天文館にて数回の打ち合わせが行われ、前年の‘83インドネシア-ニューギニア日蝕のメンバーに居た顔馴染みの数人が参加した。

実は前年の時もこの青山天文館と言う喫茶店で打ち合わせとか行われていたのだが、天文趣味のオーナーが経営しており別の会合でも度々使用し、時折徹夜もあって何かと便利な場所であった。

この日蝕で私が行った観測と言うのは相も変わらず以下となる。

- 1) 本影錐の撮影
- 2) シャドーバンドの確認
- 3) 気温変化の記録
- 4) その他 (ポラロイド写真の撮影・公開、食時刻の計測)

バージニア州リッチモンド市にはピーターズバーグと言う南北戦争の古戦場跡があり、広くもあるので我々はそこで観測する事にしていたが、生憎と朝からの曇りと雨であり、前夜に訪問した Dr. プリドゥ氏からの電話もあって、晴れそうな場所に急遽移動した。

途中のハイウェイで偶然、前を走る Dr. プリドゥ夫妻のトレーラーを発見した時は車内に歓声が起こった。場所は古い線路跡地で、我々に続いて多くの天文ファンが次々と集合し、現地は時ならぬ賑わいとなった。やがて食が始まると時折の雲に阻まれたが、進行は分かる展開となり、中心食付近に期待が集まる。

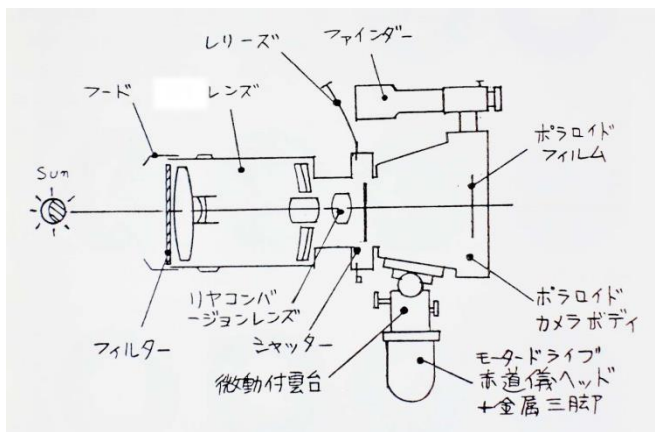


図 1

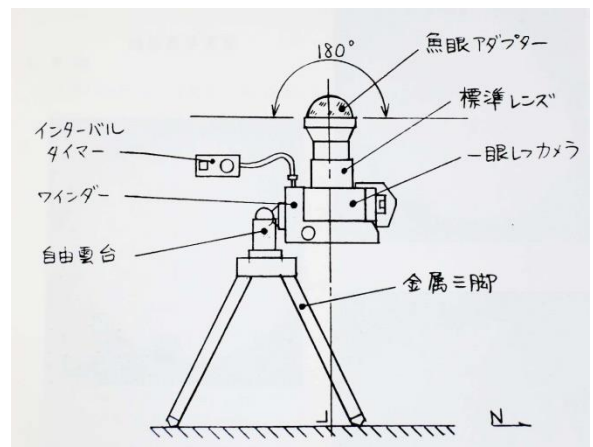


図 2

図 1 は前回に凝りもせずのポラロイドカメラシステムで、これで周囲のご同輩に同時公開して楽しんで頂く。図 2 は前回同様の魚眼アダプタを標準レンズにフロント配置した撮影システムで、インターバルタイマーにて動作させ、本影錐を捉える予定であった。

Dr. プリドゥ氏を紹介するが、氏は JTB の紹介でリッチモンド天文協会の方、昨夜は友人 2 名と共に自宅に招いてくれ、交流パーティが開催された。40 cm クラスのドブソニアンと自作の光学系を持つ反射赤道儀をお持ちです。この反射の光路を示されて「どう思う?」との事だったが、「BerryBerryGood!」とだけ答えた。また、小型の望遠鏡とか器材を多くお持ちのようで、どこの国も似たような趣味の環境になるらしい。



図3



図4

図3はDr. プリドゥ氏のご自宅で、奥様はずま屋のコレクターとして出版物を披露してくれました。蝕の当日は図4のようなトレーラーを引いて観測地においでで、愛用のNikonFを数台お使いでした。

さて、食が始まる前に器材のチェックをしていると、幾つかの準備不足な観測セットが散見され、私がいつも持参する工具や小物部品が役に立ちました。余計な重量として皆さん敬遠されますが、そんな事はありません。

いよいよ第一接触が始りましたが、理大OBの武者小路氏の予報（'83インドネシア・ニューギニア日食報告参照）より今回も少し早い気がしました。

これは第4接触にも言えて約3秒早く進行、やはり採用したベッセル要素の相違のようです。

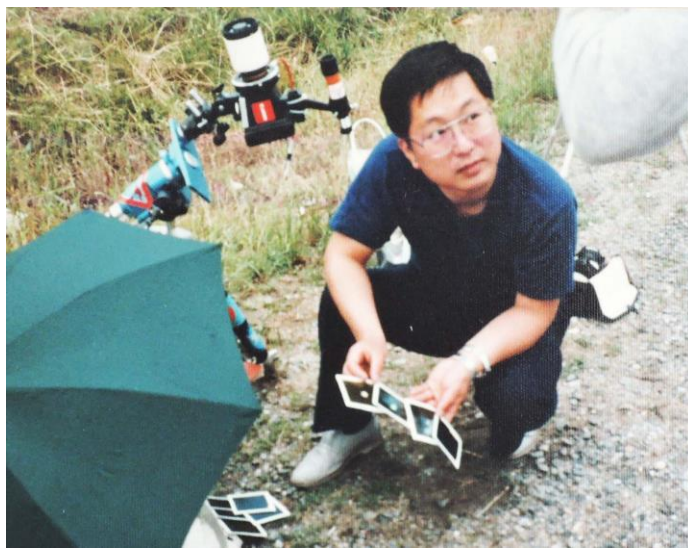


図5

図5は食の進行を自作ポラロイドカメラで撮影して得意げの私ですが、今回はポラロイド発祥の地アメリカでもあり、詰め掛けた皆様は大喜びでありました。（写真は農工大教諭・吉村公一氏提供）

図6はお馴染みのピンホール投影による今回の撮影ですが、ANNULAR ECLIPSE と表記されており、やはり金環食の類に分類されているようです。（このスクリーンの提供者は残念ながら特定出来ておりません。）

食の途中の欠けた太陽が映し出されておりますが、食の中心は雲に邪魔されてしまい、これがハイライトになりました。



図6

食が進行し、皆既?が近付くと雲が増えて来ました。上空の大気が冷えて雲が発生したようです。やがて、第3接触到掛ろうとする頃にはすっかり太陽面が見えなくなり、現地は静まり返ります。行き交うトレーラーの警笛が高らかに響くだけで、点灯している車も中にはありました。。と言う訳で金環になった瞬間だけは見る事が出来ませんでした。いつものような日蝕の気配は変わりません。



図7



図8

図7は私の捉えた第4接触数分後の太陽の姿、図8は後日にDr. プリドゥ氏が知人から入手して送ってくれたベイリービーズになった姿のプリントです。

結局、本影錐の撮影と確認には至らず、シャドーバンドも見えませんでした。

事後に同様の観測を行った他者にも聞きましたが、同じ結果だったようで、少し残念ではあります。気温変化の記録だけはしっかり取り、図9のような変化を示しておりました。

食の中心より10~20分遅れて日向で-9.5°C程度の気温低下があり、日陰では-6.9°C程度の低下となりました。

これは他の日蝕と同様ですが、今回のような薄い雲の影響は少ないのだと感じます。

図10は当日に詰め掛けた観測者達の一部で、現象を最後迄を見届けた粘り強い姿です。

(東京農工大教諭・吉村公一氏右端提供)

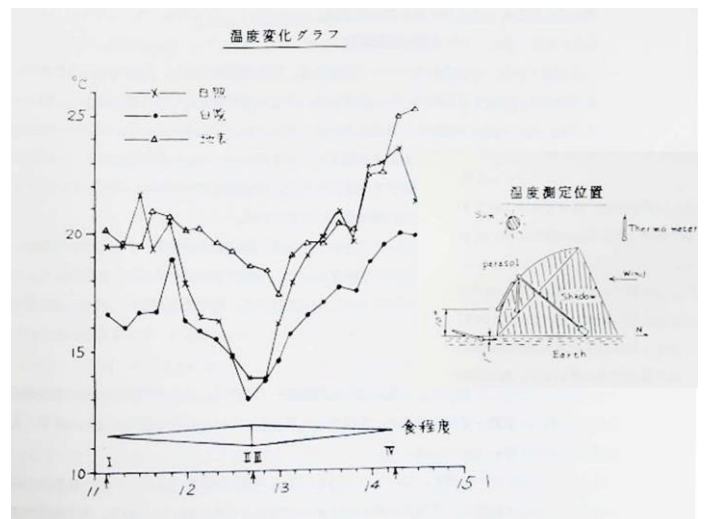


図9



図10

今回の日蝕旅行には幾つかのお楽しみ企画が付属しており、その一つがワシントンのスミソニアン博物館見学です。多くの展示がある中で、ガイドが選択して案内するのを恐れた我々は、希望する建屋に各々が分かれてのコースを設定したのです。

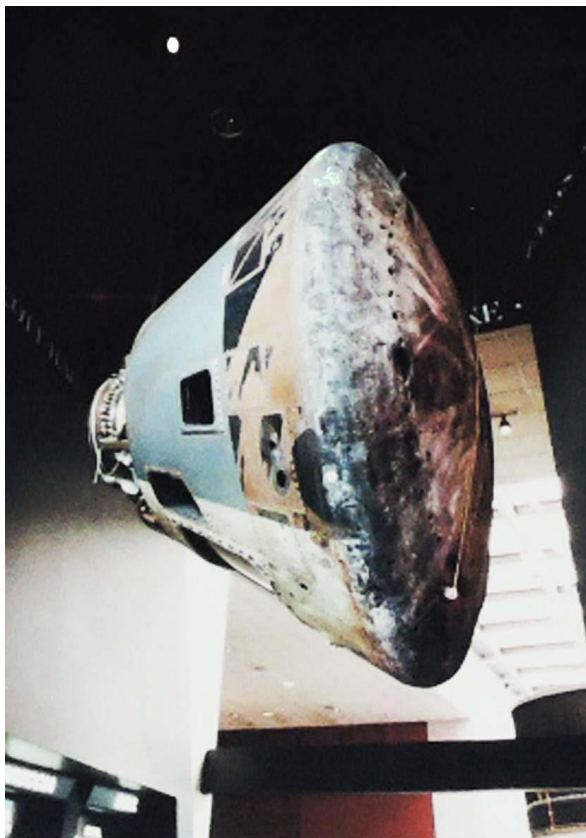


図 11

図 12 は売店の入り口を飾っていた“コンコルドで日蝕を見よう！”とかのポスターで、前回の‘80 アフリカ-インド日蝕の頃からの延長企画のようです。

今後は晴ればかりとは限らない気まぐれな日蝕に対応すべく、航空機の利用が盛んになると思え、運賃さえ許せば絶対王者となり得る観測手段です。



図 13

私と吉村氏、青山天文館の一行は勿論「宇宙開発の歴史館」に長く留まり、図 11 の帰還したアポロ司令船とか飛行機の歴史を心行くまで堪能したのです。

まだ、運用に火が付いたばかりのスペースシャトル迄の宇宙開発の遺産が本物の持つ迫力で迫って来て、幾らフィルムがあっても足りない位です。また、現物が大きいだけに建屋の中が満杯状態で、あの大きさの空間でもいささか狭く感じ、別の場所に格納されている物も多いとかで納得でありました。

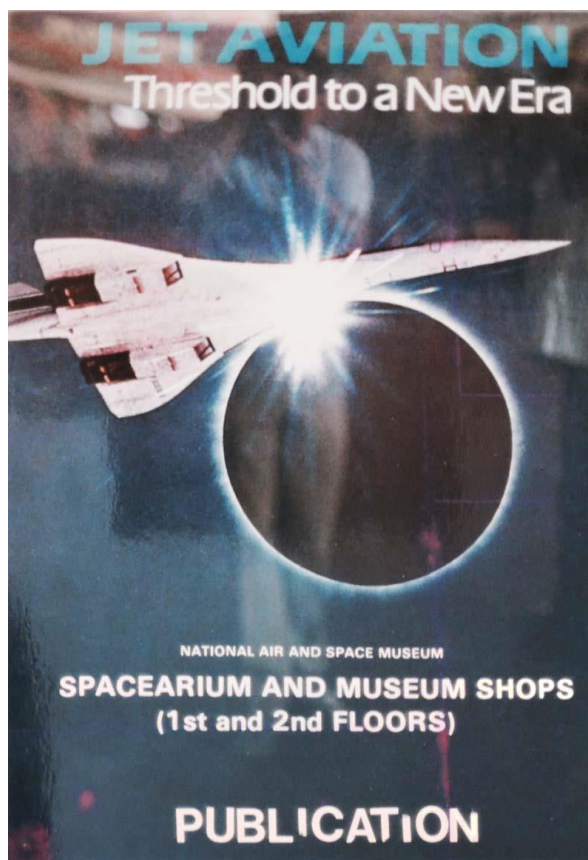


図 12

この旅行ではこの他にニューヨークのヘイデンプラネタリウムを訪れ、初めて目にするオムニマックス全天投影装置を楽しみました。

また、何の手違いからか観測地迄のバスがキャンセルされているトラブルに巻き込まれ、再度のチャーターを現地でしたので、その断りと抗議の為にニューヨークの JTB に出向く一幕もあり、普段は見れない現場も幾つか目にした今回の旅行でありました。

図 13 はあらかじめ用意した小型の団扇で、役には立たなかった物の、良い記念となりました。

了